



HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---------------------|---|
| Title | 近世日本のニワトリ利用に関する動物考古学的研究 [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 許, 開軒 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(文学) |
| Dissertation Number | 甲第15979号 |
| Issue Date | 2024-03-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/92250 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Kaihsuan_Hsu_review.pdf, 審査の要旨 |



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 許 開 軒

主査 教 授 江 田 真 毅
審査委員 副査 特任教授 小 杉 康
副査 准 教授 久 井 貴 世

学位論文題名

近世日本のニワトリ利用に関する動物考古学的研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の成果は、全体としては、遺跡から出土した動物の骨の分析に基づき、近世日本におけるニワトリの利用の時間的変遷と空間的異同を解明し、食材としてのニワトリの利用が日本で普及した過程を明らかにした点である。本論文は、遺跡から出土した動物の骨の分析から当時の人々と動物の関係を研究する動物考古学分野において、いくつかの重要な知見をもたらしたと考えられる。その成果は、具体的には以下の四点にまとめることができる。

第一に、日本の遺跡から出土するニワトリの骨の形態学的な同定基準を拡充した点である。これまで、江戸時代の遺跡を中心にニワトリの骨は多数報告されているものの、日本に分布する野生のキジ科の骨とニワトリの骨を識別する基準は十分に確立されているとは言い難い状況にあった。130点を超えるキジ科の骨の観察に基づいて本研究で明らかにされた骨の同定基準は、今後、日本をはじめ東アジアのキジ科の骨の同定に広く利用されるようになると考えられる。

第二に、骨の組織学的な分析や形態学的な観察から消費されたニワトリについてより詳細に明らかにした点である。骨の組織学的・形態学的な観察による幼鶏・若鶏や雄鶏、雌鶏、および産卵期の雌鶏の骨の特定は、これまでも一部の遺跡の発掘報告書で実施されているものの、まだ一般的とは言い難い。同様の方法を様々な遺跡の資料に適用して、各地域・各時代のニワトリの消費パターンの違いを明らかにした点は高く評価できる。

第三に、近世における食材としてのニワトリの利用に時間的な変遷があることを詳細に明らかにした点である。文献史学では、食材としてのニワトリは江戸時代に普及したこと、また江戸時代の社会情勢と密接にかかわって18世紀後半と19世紀後半に増加の画期があることが提示されてきた。しかし、文献史学上の知見は主に幕府関連史料に依拠しており、日常の様相が反映されていない可能性も考えられる。一方、これまでのニワトリを含む江戸時代の動物利用に関する動物考古学の議論では、江戸時代全体を一括りに捉えて遺跡ごとの各分類群の出土量の多寡を論じたものが多く、江戸時代内の時期差についてはほとんど論じられてこなかった。本論文では、文献史学上の知見を動物考古学資料から検討し、江戸については19世紀後半にニワトリの食用が増加する傾向が認められる一方、長崎や大坂ではより早い段階から頻繁に食用とされていたことを明らかにした。この成果は、江戸時代の歴史研究にこれまであまり生かされてこなかった動物考古学上の知見が今後注目される端緒になる可能性がある。

第四に、近世におけるニワトリの食材としての利用に地理的な違いがあることを明示した点である。これまで、近世の人と動物の関係性に関する研究は資料の多い江戸を中心に議論され、また中近世の動物遺体の研究では、都市間での比較によって地域性が明らかにされることは少ないと指摘されてきた。本研究では江戸、大坂、長崎におけるニワトリの利用が比較され、近世のニワトリの利用に地域性があることが明らかにされた。

以上のような本論文の学術的成果については、本論文の基礎をなす2本の論考が査読付きの国際誌（International Journal of Osteoarchaeology および Journal of Archaeological Science:

Reports) に、1 本が査読付きの国内誌(動物考古学)に掲載されていることから、国内外に十分に認められていることが窺われる。

・学位授与に関する委員会の所見

本審査委員会では、上述のような本論文の成果を十分に認めつつも、いくつかの問題点を指摘せざるを得なかった。

本論文では、近世において最終的には食材として利用されたニワトリの地域差や時代差が明らかにされた一方、闘鶏や時告げといった屠殺前のニワトリの用途についての検討が不十分であった点や、資料の提示が鳥類のみに限定されており、貝類や魚類、哺乳類など他の分類群の動物の利用との比較が触れられていなかった点が指摘された。また、資料の出土状況や、出土した遺構の情報など、資料の位置づけを解釈するうえで不可欠な考古学的な情報の提示が乏しい点も、口頭試問において問題点として指摘された。

しかしながら、そのような問題点は、論文執筆者自身も十分に意識していることは口頭試問を通して確認できており、本論文の達成した成果を損なうものではなく、むしろ今後、本論文の延長線上にさらに展開されるであろう研究において補われていくことがらであると考えられる。

以上、本審査委員会は、全員一致で、本論文の学術的成果を十分に認め、許開軒氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であると判断した。